『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第７５回】

数年前まで桐生市内の聖フランシスコ修道院にいらした大友恭彦修道士様が「金祝」（50 周年）を迎えられ、２月５日聖ヨゼフ修道院（東京・六本木）にて記念ミサと祝賀会が行われました。「清貧（世俗とその富からの離脱）・貞潔（肉体の欲求の制御）・服従（我意の放棄）」の三つの誓いを立て、修道士になられて 50 年。（修道院によって多少の相違はありますが）その修道生活は、起床（３～４時）～祈り～霊的読書～黙想～祈り～ミサ～朝食～祈り～労働（９時）～祈り～昼食（12 時）～祈り～労働～祈り～夕食（18 時）～祈り～就床（21 時）という日課があるようです。お気づきのように、「祈り」の時間が一日に７回！ これは『日に七たび、わたしはあなたを賛美します』という『詩編』116 章 164 節に基づいています。「労働」は神の恵みへの協力と自己鍛錬の場とされます。「祈りと労働」に従事する毎日ですね。徹底的に「イエスに従う生き方」をするのが修道生活です。大友さんの人生の「縦糸（たていと）」を紡いできた「祈り」について、話をすすめていきましょう。

✞　「祈る」ということ　（２）

多神教の「神々」とは

前回の原稿を書きながらあらためて感じたのは、「日本人が抱いている〈神〉のイメージと、キリスト教圏の国々の人たちにとっての〈神〉は、呼び方は同じでも、まったくちがった存在」であるということでした。そのことをやさしく教えてくれるのが、７年前にキリスト教関連の本ではめずらしくベストセラーになった『ふしぎなキリスト教』という本です。お二人の社会学者、橋爪大三郎（はしづめだいさぶろう）先生（東京工業大学教授）と大澤真幸（おおさわまさち）先生（元京都大学教授）がお書きになりました。要約しながらお話しします。

橋爪先生は『日本人は、神さまはおおぜいいたほうがいい、と考え』ているとみます。なぜかというと、『神様は、人間みたいなものだ』と受けとめているからです。いや、人間よりもちょっとエライけれど「仲間」であり、あるいは「友だち」か「親戚」のような存在だとされます。「仲間や友だちはおおぜいいた方がいい。友だちもろくにいない人間なんて、たいしたヤツじゃない。友だちがたくさんいるということは自分が信頼されていることの証拠だ」と多くの日本人は考えます。また、そのつき合い方の根本は『仲よくすること』だと先生は言います。たくさんの人と仲よくすれば、その人たちとお互いに認め合い、支え合うことができます。これが『日本人が、社会を生きていく基本』です。このやり方を人間ではない「神さま」にも当てはめます。そうすると、『神道のような多神教にな』ります。

日本には「八百万（やおよろず）の神々」がいると言われます。実際に 8,000,000 いるのではなく、きわめて多いことを表現するときに用いられます。私たちの身近にいる（？）神さまたちをご紹介すると ―

◆「天神様（てんじんさま）」：「受験合格」。受験生の恋人です。わたしは何度もフラれました。

◆「福助（ふくすけ）」、「稲荷神（いなりのかみ）」など：「商売繁盛」。福助印の肌着、まだあるのかな？

◆「恵比寿神（えびすのかみ）」：「商売繁盛」や「大漁祈願」。私にとって恵比寿といえば「ビール」です！

◆「日本武尊（やまとたけるのみこと）」：「武運長久」。「勝たせてください」。今は、スポーツ選手ご用達？

◆「弁財天（べんざいてん）」：「富と食と子孫を恵む」女神さま。（井の頭公園にカップルで行くと女神さまに嫉妬されて結ばれないと彼女が言った。だからボクたちはお参りしなかった。なのに、どーして!?）

◆「大国主命（おおくにぬしのみこと）」：「良縁成就」「国土開発」。「因幡（いなば）の白うさぎ」、なつかしいな。

ほかにも「無病息災」、「家内安全」、「病気治癒」… などをお願いする神々がいます。書き出し

たらきりがありません。神々に願う内容をみると、「自分のため」が圧倒的に多く、範囲が広がっても「家」、自分をとり囲む「共同体(地域社会)」の発展・安全などのための願いであると言えます。前回のハインリッヒ先生の指摘は的を得ています。さらに橋爪先生は、『日本人の考える神様の本質は、実は、自然現象』であり、『それをばらばらにして、それぞれを神様と考えることにした』とされます。山も川も、海も太陽も「神」であるというように、すべてを人格化し、『われわれの社会には、超越的な世界 ― 手の届かない領域 ― はない、と安心する』のが日本人だと指摘されます。

一神教の「ゴッド(God)」とは

そのまったく逆で、たくさんの神さまたちを「一」にする「一神教」の神さまとはどんなお方でしょう。一神教の「God(神)」は、「人間みたい」ではなく、「仲間」や「友だち」、「親戚」でもなく、『まったくのアカの他人』だと橋爪先生は言います。「God」が人間を創造したのなら、『つくった God は「主人」で、つくられた人間は「奴隷」です。人間を支配する主人が、一神教の「God」』というわけです。「奴隷」とは思い切った表現ですね。わかりやすさを前面に出した先生のユーモアたっぷりの表現です。

橋爪先生は佐藤優氏(作家。元外務省主任分析官。)との共著『あぶない一神教』の中でも以下のように発言しています。「God」にとって人間は「モノみたいなもの」であり、モノは造った人の所有物ですから、モノを造ることも、こわすことも、捨てることもできます。『一神教文明は、身近な神さまがたくさんいる日本社会の裏返し』とも言えるのです。一神教文明は、「God」と人間の関係を大切にします。人間は創造主である神さまに対してへりくだり、礼儀を守らなければなりません。「よう、神サン！」なんて、なれなれしい態度なんてとれません。自分は「God」につくられた「モノ」であることを自覚しなければなりません。この関係を先生は『これが、God と人間の関係の、基本の基本』だとします。

「高校や大学の体育会系部員間の上下関係みたいでイヤだな」、「おれたちはモノかよ」とお思いの方もいらっしゃるでしょう。安心してください。そんな関係をぶっ壊そうと、『イエスは「愛」をのべて、大転換が起こる』と先生は書いています。

そうなんです。『一人息子を与えたほどに神さまはこの世を大事になすった。これはすべての和子にその身も心も委ねる者が、誰も滅びぬようにして、いつでも明るく活き活きと生きる力を与えるためだ。』(山浦訳『ヨハネ』3－16)』(新共同訳：「神は、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」)』とあるように、それまでの「主人⇄奴隷」という神さまと人間の関係を、「父⇄子ども」あるいは「父⇄弟子」という「愛によって結びついた関係」にしてくれたのがイエスです。

「祈る」とは

山浦玄嗣先生によると、『新共同訳』聖書の四つの福音書の中に「祈」という文字がいくつあるかをしらべたところ、「74」あったそうです。これ、数えるのってたいへんでしょうね。そして原文のギリシャ語を調べると、「祈」には「四つの異なる単語」が使われていているといいます。

▷プロセウコマイ　祈る。54 箇。　▷エウカリステオー　感謝する。8 箇。
▷エウロゲオー　賛美する。礼拝する。8 箇。　▷デオマイ　自分に都合のよい事を願う。4 箇。

圧倒的に多いのが「プロセウコマイ」(名詞：「プロセウケー」)で、約 74%を占めます。先生は『プロセウコマイこそ、神さまに対するユダヤ教徒の基本的な姿勢』であり、ユダヤの人たちは『イ

スラエルよ、聞(シェマー)け。わたしたちの神、主こそ、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたたちの神、主を愛しなさい。』（『申命記』6章4～5節）という「シェマー(聞け！)の祈り」といわれる言葉をもっとも大切にし、『この短い言葉にユダヤ教の神髄が凝集してい』るとされます。

多神教的な考え方に対立するのがユダヤ教の思想です。橋爪先生が語ったように、神さまこそが人間の「主(あるじ)」であり、人間は神さまのご計画のためにつくられた「道具」、「モノ」なのです。ですから神さまを自分の都合で動かしたり、あれこれ要求する立場にはないのです。ユダヤの人たちは、『ただひらすら、神さまのお声を聴くことこそが人として最も正しい態度だと考えたのです』(山浦先生)。

「主よ、お話しください」― 「祈り」とは「聴くこと」！

「神さまのお声を聴く」とはどういうことでしょう。そのいい例が次の「サムエルの祈り」と言われる箇所です。

……

『主は三度サムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったのでまいりました」と言った。エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、サムエルに言った。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕(しもべ)は聞いております』と言いなさい。』 サムエルは戻って元の場所に寝た。』（『サムエル記 上』3章8～9節）

……

サムエルは紀元前11世紀末の預言者の一人です。「預言者」は「予言者」とはちがいます。「予言」は、ある人間が「未来のことを予測して言う言葉」ですが、「預言」は「神さまの霊感を受けた者が神さまのお告げとして語る言葉」です。以前お話した『イザヤ書』のイザヤもその一人です。

エリという人物も預言者で、サムエルの先生に当たります。サムエルは幼いころからエリのもとで育てられました。ある夜、主の神殿で寝ていたサムエルは自分を呼んでいる声を聞きました。先生がお呼びだと思いエリの所へ行きますが、「わたしは呼んでいない」と言われます。これが三度繰り返されました。エリは三度も同じことが起こったので、サムエル少年を呼んだのは「主」であると気づき、「主よ、お話しください。僕(しもべ)は聞いております」と言うように伝えます。主の四度目の呼びかけにサムエルは言われた通りに答えると、神さまは語りかけられた ― という話です。

「人間が神さまに向き合う態度の基本」がこれだとユダヤ人たちは考えていました。日本語の「祈り」は「願い」と同じですが、「祈る」と訳された「プロセウコマイ」とは、『神さまの声に心の耳を澄まし、神さまがこの自分をどのような道具としてお使いになろうとしていらっしゃるのかを聴くこと』だと山浦先生は受けとります。つまり、神さまをこころから敬い、自分を投げ出して仕えること、さらに神さまを信用して疑わないことだけではなく、神さまにすべてを委ね、頼りにすることによって出てくる『心の叫び』が「プロセウコマイ」なのです。

では、私たちが手にしている『聖書』における「祈り」あるいは「祈りなさい」等と訳されている箇所を、山浦先生の解釈で訳すとどうなるのでしょう。『マタイ』5章43～45節を取りあげて、『新共同訳』と『山浦訳』を比べてみましょう。

……

43 あなたがたも聞いているとおり、「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられている。44 しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために**祈りなさい**。45 あなた方の天の父の子となるためである。

……

「自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われても、どう祈ったらいいのでしょう？　自分に害を加え、苦しめるヤツのためにどうして祈れるでしょう。「冗談じゃねェぜ！」と思うのが私たちです。（「そんなことはできません！」という方は、第20回を読み直していただけたらと思います。）

これが『山浦訳』では次のようになります。

……

43 お前さんたちも聞いている通り、『身内、仲間を大事にしろ。敵（かたき）は憎め』と言われている。44 加えて、この俺は言っておく。敵（かたき）といえどもどこまでも大事にし続けろ。さらにはだ、自分をさいなむ者のために何かよいことをしてやりたいものですが、**何をしてやったらよいでしょうかと、神さまのお声に耳を澄まし続けろ**。45 そうやって、天の父（とと）さまのいとし子になれ。

……

『新共同訳』では『祈りなさい』だけで、自分をいじめる者に対して何を・どう祈ったらいいのかわかりません。だから「冗談じゃありません、そんなことはできません」になるのです。ところが『山浦訳』では『祈りなさい』を、自分を憎む相手に「何をしたらその人のためになることができるか」を教えていただくために「神さまの声に耳を澄まし続けなさい」と訳され、「祈り」の具体的な内容が示されています。「わたしを憎む相手に何ができるだろう？」と考える前に、まず「神さまの言葉を聴く・神さまに教わる」ことが必要なのです。

ここで覚えておきたいのは「大事にし続けろ」、「耳を澄まし続けろ」という表現です。「～し続ける」ということは「継続」を意味します。それが「簡単にはできない」、「すぐには実現しない」からこそ、「し続ける」のです。くり返し、心をこめて神さまに耳を傾け、すすむべき道を探し求めることが祈りであり、神さまはそんな私たちを見ておられ、報いてくださるのです。

『彼らをお赦しください』

「自分をさいなむ者」に対して何を祈ったらいいのかについて、イエスご自身が遺した言葉があります。イエスは十字架上でおっしゃいました。『父（とと）さま、この者らはおのれがしていることのいかなることかを一向にわかっていないのでございます。ですから、この者らを赦（ゆる）してやってくださりませ（『ルカ』23章34節）』。

いまや息絶え絶えの状況にあっても、「わたしを十字架にかけた律法学者やファリサイ派の人々は、自分たちが何をしているのかわかっていないのです。だから彼らを赦してやってください」と、彼らへの「赦（ゆる）し」を祈ったのです。この祈りの中に、「救い主・イエス」の私たち人間への愛が輝いています。（この「赦す」ということについては後日、別の項でくわしくお話しいたします。）

神さま、あなたと歩んでいらした大友修道士様の50年はどのような月日だったのでしょう。毎日があなたとの「対話」のくり返しであったことは確かです。大友さんの人生の「縦糸」が祈ることによって紡がれ、「横糸」の一部に私たち桐生教会の兄弟姉妹も織り込まれたことに感謝いたします。

神さま、これからも大友さんにたくさんの祝福をお与えください。また、私たちが「祈り」の中で、あなたの声を聴くことができますように。　（2018.03.01.）

【引用・参考にした書籍など】
・橋爪大三郎、大澤真幸　『ふしぎなキリスト教』
・橋爪大三郎、佐藤優　『あぶない一神教』（小学館新書、2015）
・大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃 編集　『岩波キリスト教辞典』
・山浦玄嗣『イチジクの木の下で（下巻）』、『ガリラヤのイェシュー』
・「神道」に関するインターネットのサイト　　・『大辞泉 第二版 第1巻』